

## テッサロニケの「熱心党」について

渡 辺 金 一

(27) テッサロニケの「熱心党」について

ここにいうテッサロニケのゼロタイとは、一三四二年の夏の初め貴族支配を排してテッサロニケ市政を奪取したグループのことであり、コンスタンティノープルにつぐビザンツ帝国第二の都市テッサロニケを舞台に展開されたゼロタイによるこの市政権掌握は、急迫するビザンツ帝国の十四世紀中葉の対外・対内情勢のもとで、それと密接にからみあいつつ、一三五〇年初めの貴族反動の勝利まで、七年以上におよんだのであった。

ゼロタイの蜂起と関係ある十四世紀の四十年代の最も重要な政治的事件は、いうまでもなく、ビザンツ帝国の内乱であった。一三四一年六月十五日、バライオロゴ

ス朝のアンドロニコス三世は十歳に満たない息子ヨハネス五世をのこして他界したが、この幼帝のもとで、摂政となつたサヴォア出の皇太后アンナ、国家財政で辣腕をふるつた成り上り者のアレクシオス・アボカウコス、それに総主教ヨハネス・カレカス、の三者が組んで先帝統治の第一の実力者、大豪族のヨハネス・カンタクゼーノスを排除しようとし、首都から閉め出しを食つた後者は、同年十月二十六日デュモテイコスで、バライオロゴス朝のヨハネス五世の權威を認めつつも自ら皇帝を名乗り、ここに内乱が勃発したのである。それは一応、一三四七年二月三日のカンタクゼーノスのコンスタンティノープル入城で落着をみた。カンタクゼーノスは娘のイレネをヨハネス五世に輿入れさせ、こうして出来上つたバ

ライオロゴス朝との姻戚関係を基礎に、先帝アンドロニコス三世の「精神的」兄弟、ヨハネスおよび自身の子女の「共通の父」として、自らに正帝の地位を主張し、同年五月十三日ヨハネス六世として戴冠式をあげた。しかしながらこの措置に不満なヨハネス・バライオロゴスは一四五二年秋ついに舅に対して旗あげし、一三五四年十一月コンスタンティノープルに入城してヨハネス六世を廃位、修道院におくりこんだ。こうして内乱は終焉した。それは実に十三年のながきにわたるものであった。しかもそれはもはや純然たるビザンツ帝国の内紛の域をはるかにこえていた。バルカンのセルビア、ブルガリアの両南スラヴ人国家、小アジアのセルデュック・トルコ人、つづいてオスマン・トルコ人、それにイタリアの二大商業都市ヴェネツィアとジェノヴァ、は内乱に介入し、相対立する陣営のいずれか一方に加担することによって、そこから領土上の利益をひき出したのである。

ゼロータイはこの内乱で終始一貫、バライオロゴス朝の正嫡ヨハネス五世に対して忠誠を維持しつづけた。そもそも一三四二年のゼロータイの蜂起そのものが、テッサロニケ総督シュナデノスとかれを支持する貴族の一

党の、まちをカンタクゼーノスに委ねようとする画策に反対しておこったものであった。シュナデノスとその一党が逃亡したあと、かれらはコンスタンティノープルからアレクシオス・アポカウコスの息子ヨハネス・アポカウコスを新総督として迎えることになった。もともとかれらは、自分たちの指導者ミカエル・バライオロゴスを通じて、市政の実権を手中に収めていた。一三四七年ヨハネス六世カンタクゼーノスがコンスタンティノープルで名実ともに自らの皇帝支配を樹立してからというもの、ゼロータイの牛耳るテッサロニケは、文字どおり独立の都市国家の観を呈した。

十四世紀の四十年代はまたビザンツ帝国で一種の神秘主義、静寂主義ヘシカズムをめぐって宗教上の論争がおこり、これが政治的対立と重ね合わされるといふ特異の情況を現出したが、ゼロータイは宗教問題に対しても特定の態度を保持した。

ヘシカズムは十四世紀の三十年代シナイのグレゴリオスによって東方からビザンツ帝国に導入され、ビザンツ修道院の中心アトスにおいてことに流行した神秘主義的・禁欲主義的教説であったが、ヘシカストたちが説く

ヨガにも似た特異の修行道に対してカラブリア出身の修道士バルラームが批判を行い、これに承えて当代随一の神学者グレゴリオス・バラマスがビザンツ伝統の神秘主義的立場からヘシカズムに独自の神学的・哲学的根拠づけを行ったところから、当時のビザンツ知識人をまきこむ一大論争にと発展したのであった。修道士の帰依するこのヘシカズムに対して、もともと世俗的思考の持ち主である教会上層部のいわゆる「ポリータイ」は拒否的であり、一三四一年はじめのコンスタンティノープル宗教会議でバラマスの教説は認められたものの、つづいておこった政変で政権の一翼を担うにいたった総主教ヨハネス・カレカス(一三三四—一三四七)はヘシカズムに対する断固たる反対者であり、ビザンツ教会の長として、この線にそった宗教政策を遂行し、首都でヘシカズムを厳禁するとともに、グレゴリオス・バラマスを投獄したのである。ヨハネス・カンタクゼーノスは逆にヘシカストたちと一そう緊密にむすびつくことになった。

テッサロニケのゼロータイは一貫して反ヘシカズムの態度を持した。かれらは総主教ヨハネス・カレカスがテッサロニケ都主教として任命したマカリオス(一三四

二)、なかんずくファナティックな反ヘシカズム派修道士としてきこえ高いキプロス出のヒュアキントス(一三四二—一三四六)をむかえ、後者をして都主教管区内からのヘシカスト・バラミストの一扫につとめさせた。つづいて、カンタクゼーノスの首都入城に先立って一三四年二月二日にコンスタンティノープルで開かれ、カレカスの廢位とバラマス派のイシドーロスの総主教就任を定めた宗教会議が、バラマスを釈放し、テッサロニケ都主教として送りこもうとしたとき、ゼロータイは城門を閉してこれをいれず、ためにバラマスは空しくひき上げざるをえなかった。一三五〇年はじめヨハネス六世カンタクゼーノスがゼロータイを最終的に鎮圧し、娘婿のヨハネス・バライオロゴスを伴ってテッサロニケ入りしたとき、バラマスははじめて聖デメトリオスのまちの都主教座に就任することができたのである。当時の保守的教会人たちがゼロータイをバルラーム、および、同人のイタリア帰還後反ヘシカズムの闘士の役割をひきついで西ヨーロッパ・スコラ哲学に造詣深いビザンツ修道士アキンドュノス、の弟子たちとみなしていたことも、ゼロータイのヘシカズム・バラミズムに対する特別の態度のし

からしむるところであった(S. Philoteos, Vita S. Sabbae, ed. Papadopoulos-Kerameus, Analecta V, 326)。

以下にのべるようにゼロータイの蜂起はすぐれて社会的な事件であったけれども、政治面においてかれらがバライオロゴス朝皇帝に対する忠誠を通じて表白した正統主義。宗教面において、かれらがヘシカズムの拒否によって示した反神秘主義的立場。この二点はそれぞれ独自の研究対象をかたちづくるであろう。ともかく、それらは簡単に、かれらの階級的立場の係数として割り切りうるものではあるまい。また、かれらの階級的利害関係からの打算であるともいきれまい。むしろそれは、ゼロータイ運動をつきうごかしたかれらのイデオロギーとの関連で解決さるべき問題であろう。同じ問題はビザンツ封建家族と神秘主義との独自のかかわりにも介在している筈である。

(1) その概観および十四・十五世紀のビザンツ世界の問題は、本稿と同時執筆の拙稿「十四・十五世紀のビザンツ帝国」岩波講座 世界歴史11中世5『中世ヨーロッパ世界Ⅲ』をみよ。

## 二

ゼロータイ運動が反貴族主義をもって一貫した社会運動であったこと。このことは運動の展開の劇的諸段階に何よりも明白にあらわれている。二人の同時代ビザンツ史家の記述からこの点は明らかである。その一人はいうまでもなくゼロータイの仇敵ヨハネス・カンタクゼーノスであり、いま一人は、カンタクゼーノスの友人ではあるが、ギリシア教父の教説を基礎に古典古代文化を撰受する代表的ビザンツ教養人として、さいしょバルラームが西方から持ちこんだ新しい哲学を批判するとともに、つづいてバルラームがイタリアに去ったあと、バラマスの神秘主義に反対の論陣をはったニケフォロス・グレゴラスであった。ただこのグレゴラスもゼロータイに対する評価は全く否定的で、ゼロータイのはじめた政治は、「ポリテイアのいかなる形態をも想起させず、……奇怪な愚衆政治にすぎなかった。」<sup>(2)</sup>

(一) 一三四二年のゼロータイの蜂起  
 すでのべたように、蜂起はテッサロニケ総督シユナデノスとその一味がまちをカンタクゼーノスに委ねよう

とする陰謀に対しておこった運動であったが、ゼロータイは「民衆」(*dēmos*)を「有力者」(*dynatoi*)に対してたち上らせることによって、シユナデノスと千人の貴族をまちからおい出すことに成功したのである。そのさいかれらが旗印としたのは「聖所から盗んだ十字架」であった。<sup>(3)</sup>

当時ビザンツ帝国のあらゆる都市と農村で社会は上層と下層とに二分してはげしく対立しあっていた。教養あり、富と社会的名声とを持つ者と、そうでないものとがそれであった。<sup>(4)</sup>一三四年の内乱で貴族、なかんずくトラキアの豪族、の支持を仰いだカンタクゼーノスに対し、アポカウコス<sup>(5)</sup>は貴族に対し憎悪の念を懐いている民衆を拠り所とし、すべての属州と都市に使書のたばを送って、「民衆」(*δημοτικόν, βίβλου του δήμου*)を貴族(*cf. τῶν πλουσίων, τῶν δούλῳ καὶ γένοι προσήγορεύου*)に対して蹴起するようよびかけたのであった。<sup>(5)</sup>

「有力者」(*dynatoi*)に対する「民衆」(*dēmos*)の反抗の狼煙が最初に上ったのは、トラキア都市アドリアノーブルであった。このまちの貴族は、コンスタンティノーブル政府に対して叛旗をひるがえしたカンタクゼーノ

スの、自派への参加をよびかける使書に接して、これをうけいれるための「集会」(*ἐκκλησία*)を開いたところ民衆の拒否にあり、その場では一たんかれらの声をおさえることに成功したものの、明けて一三四年十月二十七日、公然たる民衆の反抗を蒙ることになったのである。民衆をたちあがらせたのは、農業労働者(*cf. τῶν δήμου ἐξ ἐξ. ἀκατάβη προσήγου καὶ γενοὶ καὶ γλιόχρους ἐκ τούτων πορτοδύμενος τῶν βίβου*)の「ブラノス」および「二人の仲間」(*καὶ δύο προσεταραραγμένους τινὰς ἐτάρους*)であり、かれらは夜つびで民衆を戸別訪問し、貴族に対する蜂起を説いてまわったのであった。民衆は逃げおくれた貴族を捕えてコンスタンティノーブルに護送するとともに、その財産を没収した。<sup>(6)</sup>

このアドリアノーブルの先例はまたたくうちに他のトラキア諸都市の追隨するところとなった。ヨハネス五世パライオロゴスに忠誠をつくさなければならぬと考えた「民衆」(*τῶν δήμων*)は、カンタクゼーノスに好意を寄せる「貴族」(*τῶν ἀρίστων*)に対し、<sup>(7)</sup>ささいなきっかけをとらえて「革命」(*παρασημασία*)をおこしたのである。

(一) 一三四年の陰謀

アドリアノーブル以下のトラキア都市が一三四五年の冬までに、貴族の反革命によってカンタクゼーノスの手に落ちたのにくらべ、テッサロニケでは依然ゼロータイの支配が続いたものの、これらの地位は決して安泰でなく、さまざまの陰謀に見舞われた。

一三四三年秋カンタクゼーノスは同盟者たるアイディンのエミール、ウムールのひきいるトルコ艦隊とともにテッサロニケを包囲しその周辺を荒した。そのときウムールは降伏の代償としてキリスト教徒捕虜の釈放を提案したので、捕虜を近親者としてもつまちの住民の動揺はおおいかくせなかった。勿論ゼロータイはこの提案を拒否するとともに、貴族および富裕な住民層の反革命の陰謀にきびしい措置を講ずることによってこの危機を乗り切った。

陰謀の廉でゼロータイによって捕えられた一人は、パライオロゴス家一門に属する貴族であった。かれは自宅から広場にひき出されて処刑され、その身体は四つ切りにされてまちの四大門に晒される一方、人々は首を槍先にさしてまちをねり歩いた。いま一人は「中産層」(μέστων)に属するガバラス某であり、人々はかれの耳を

まず切り、つづいて四肢をきりおとしたのち死にいたらしめた。そのほかにも少からざる者が耳と鼻を切られて市外に追放された。おそらくゼロータイをしてかかる過激な措置をとらせた背景は、トルコ人の難をのがれてまちに家畜をつれて逃げ込んだ農村の住民、および、家畜の病死がひきおこした悪疫に悩まされたまちの住民、の間に醸成された「反乱」(στρατιά)気分であった。<sup>(10)</sup>ウムールはコンスタンティノーブル政府からひそかに撤退金をうけとってアイディンに帰還し、つづいてカンタクゼーノスも包囲をあきらめてトラキアにしりぞいた。

(三) 一三四五年の貴族大殺戮<sup>(11)</sup>

テッサロニケには、コンスタンティノーブルから派遣されて来たアレクシオス・アポカウコスの子ヨハネス・アポカウコスが総督として駐在していたが、これとならんでゼロータイの首領ミカエル・パライオロゴスが居り (cf. *regálaiou tou tou Zygariou kai sundoxeu kaiinou terqimios*)、市政の実権はむしろ後者の手中に握られていた (cf. *opwv de tous Zygariou iayouras erproxi kai tñu kólu piáau iayouras di éuraw, kaiiw de keuvu duoia tñs aqñs repákrómeyou, devu étrwiro*

*kai hēgōnēte oi mesotēs. wōn* には *Παλαίστιος τῆς  
ἡ Μεγαλῆ, ……; ἡ τῆς ἡ μάκτα, τῆ ἑσουλῆ γαί-  
νεος οἱκ ἱσος*)。これを不満としたヨハネス・アポカ  
ウコス<sup>(12)</sup>はゼロタイのヘゲモニーから脱すべく、貴族の  
支持をもとめてカンタクゼーノスの陣営にふみきるとと  
もに、まちの最も人気のない地区にミカエル・バライオ  
ロゴスを誘い出して暗殺した。「人々」(ὄχλος)はゼロ  
ータイ首領の殺害に無感動であった。「かれらは以前か  
らゼロータイに好意を懐いていなかったが、それは、ゼ  
ロータイが人を人と思わず、神を神と思わない、思いあ  
がった態度で (ὀφείλουτες) 多くの悪事を働いたからで  
ある」

実権を掌握したヨハネス・アポカウコスはカンタクゼ  
ーノス派の旗印をかかげ、貴族のために権利回復をおこ  
なう一方、ゼロータイを逮捕して近傍の諸都市に送り監  
視するとともに、ゼロータイのシンパとみられる市民を  
まちから追放した。しかしながらかれの政策は必ずしも  
カンタクゼーノス一辺倒ではなく、カンタクゼーノス派  
の富裕な者に対し、ミカエル・バライオロゴス暗殺の共  
犯者たる事実をばらすぞと恐喝しながら、多額の資金を

まき上げる芸当もやってのけたのである。

一三四五年六月十一日、アレクシオス・アポカウコス  
は敵陣営の者たちが投げいれられている宮殿内の牢獄を  
巡視中、囚人たちに襲われて絶命した。父への気兼ねか  
ら解放されたヨハネスはいまやはばかることなくカンタ  
クゼーノス派たることを公然と宣明するとともに、テッ  
サロニケをカンタクゼーノスに明け渡そうとして「貴族  
およびまちの守備隊から成る集会を開き」(και αὐτοὺς  
ἐκλήθησαν συναγωγῆς συναγωγῶν ἐκ τῆ τῶν ἀρίστων και  
τῆς στρατιῆς και τῶν ἀλλῶν τοῦ τῶν μάκτα εὐ  
λόγη) その承認をとりつけた。この決議に基づいてヨハネ  
ス・アポカウコスがカンタクゼーノス側に対し、テッサロ  
ニケ移譲の条件として持ち出した条件は、(一)「共同体  
に対する免租特権」(ἀρέθειαν κοινῆ τῆ πόλει) の保証、  
(二)ヨハネス・アポカウコスおよび「他の貴族」(τοῖς  
ἀλλοῖς τοῦ δουρατέριου) と守備隊が従来の地位と収入  
をひきつづき保持するという保証であった。交渉のため  
派遣された使節が明るい見通しを懐いてまちに帰還した  
ときおこったのが、ゼロータイ側の巻きかえしであり、  
それを指導したのはアンドレアス・バライオロゴスであ

った。

かれはゼロータイのメンバーであったが、穩健であったため他のゼロータイのような追及をうけず、さきの集會に招かれた次第である。しかしそこで決議はかれの意に全く副わぬものであった。ヨハネス・アポカウコスが自宅に集めた会合で、かれはひとり前回の決定に反対をとなえるとともに、席上から姿を消して、海港地区におもむいた。そこには「住民中もとても恐るべき部分であり、過去のすべての反乱でつねに民衆のリーダーシップをとってきたところの海員たち」(τὸ ναυτικόν, οἱ πλείστοι τῆς ὕλης καὶ πρὸς γούνας εὐχεστῆς, ἄλλως τε καὶ ὑπάρχοντες πύρες, ὡς περὶ τὸ κριτικὸν εἰς τὸ ὄμιον, καὶ σχεδὸν ἐν ταῖς στάσεσι πύρας αὐτοὶ τοῦ πύρος πύρας ἐρηγούνται προθύμως ἐπιπέσειν, ἢ ἐν ἄλλοις αὐτοῖς) が住んでいた。アンドレアス・バライオロゴスはかれらの結成している組織の長であった関係から、かれらによびかけをおこなったのである。かれとならんで人々を蹶起にかりたてた者に貴族のゲオルギオス・コカラスもいた。かれもまたテッサロニケのカンタクゼーノスへの移讓を決定した集會に出席し、この決議に心なら

ずも加わった一人であったが、かれの場合にはヨハネス・アポカウコスとの個人的関係もからんでいた。

アンドレアス・バライオロゴスは、ヨハネス・アポカウコスの反革命以来テッサロニケ周辺をうろつき廻ったが、かれらはたちまちにして結集した。ミカエル・バライオロゴス殺害のときには冷淡であった民衆も、今回はゼロータイのアピールに応えて反貴族蜂起にたち上る氣構えをみせた。

海港地区ではゼロータイと海員とが夜つびで武器をぶつけ合せては音響をひびかせ、叫び声をあげ、ラッパを吹きならして氣勢をあげた。これに対してアポカウコスと貴族の一党も武装して、テッサロニケのアクロポリスの城塞に結集した。明けて翌日、民衆はついにゼロータイ側についてたち上った。これに反してアポカウコス側は、守備隊が仲間の市民と互いに干戈を交えるに忍びないといつて撃つて出ず、城塞内にひきこもってしまふ始末で、自分たちも同じくそこにたてこもらざるをえなくなった。民衆は城塞内に殺到し、アポカウコス以下百名ほどの貴族は捕われの身となった。ゼロータイは遂にふ

たたびテッサロニケ支配を樹立した。カンタクゼーノス側の救援部隊はペロイアからテッサロニケ城外に到着したものの、為すところなしと判断してひき上げざるをえなかった。

その日の昼頃、捕われの貴族が脱走して城塞を制圧し、ペロイアからの援軍を待っているという情報がまち中にひろまった。民衆はふたたび武器を手にしてアクロポリスにかけのぼった。しかしアクロポリス住民はすでにその日の朝の攻撃でひどい被害を蒙っていたので、その二の舞をおそれて城門を閉し、城壁にのぼって、攻撃側に対し自分たち丈は攻撃の対象からのぞいてくれるよう歎願した。攻撃側は、貴族を高さ七メートル以上もある城壁の上からつきおとして、自分たちにひき渡す、という条件で、上のまちの住民の申し出でをのむことになった。

ヨハネス・アポカウコスが最初の番であった。かれはつき落されたが、奇蹟的にも大して怪我をしなかった。民衆は一瞬たじろいだ。しかしながらゼロータイの一人が仲間の弱気をなじりつつすみでて首をはね、つづいて他の者たちがのこされた身体を刀でつきさした。貴族は城壁の随処で、指名にしたがってつきつきにつきおと

された。民衆はかれらの首を切っては、体をきりこまざいた。

アンドレアス・パライオロゴスとゲオルギオス・コカラスは敗者に対する情け容赦を民衆にもとめ、大量虐殺を思い止まらせようとしたが、民衆の聴くところとならなかった。民衆はコカラスの身内だからといって手加減を加えなかった。コカラスは一人の義兄弟を自宅にかくまっていたが、他のゼロータイたちは民衆をひきつれてかれの家の前に現われ、ヨハネス・アポカウコスの許で羽振りをかかせていた頃多数のゼロータイを迫害したという廉でその者を直ちにひき渡すようコカラスにもとめた。コカラスがことわりきれなくて本人を民衆にゆだねると、怒れる民衆は情け無用とばかりこれをたちどころに殺害した。「当時、民衆のなかには人間の脂肪を賞味した者たちさえあったといわれている。殺された者の肉体がばらばらに切られて内臓が四散すると、或る者はその脂肪を無感覚に集めて家に持ち帰った。妻はそれが何からとられたのか知らず、なにか別の動物のものだと考えて、調味料として鍋に投げ入れた。食べ終ってから夫の話しをきいて妻ははじめてそれが人間の脂肪だと知

ったのである。」こうして貴族の反革命は鎮圧された。

(四) ゼロータイ運動の終焉<sup>(13)</sup>

一三四五年の貴族反動が打倒された直後、コンスタンティノープル政府はアレクシオス・メトキテスをテッサロニケ総督に任命し、ゼロータイの首領アンドレアス・パライオロゴスとの両アルコン制がひきつづき存在することになった。一三四七年カンタクゼーノスがコンスタンティノープルに入城して正帝の座を占めると、ゼロータイは、自らが忠誠を傾けているのはヨハネス・パライオロゴスであって、後者から皇帝権を奪ったヨハネス・カンタクゼーノスは敵なりと宣言し、「事実上テッサロニケに独自の政権を打ち立てた」(*τῆς ὁμοθυμαδὸν ἐκείνης τῆς Θεσσαλονίκης ἀρχῆς κεραιούρας*)。「4たりのアルコン、ことにゼロータイを擁するアンドレアス・パライオロゴスは過去の事例に徴して他の市氏たちの恐怖のまどであり、何人も敢てかれの悪口をささやこうとはしなかった。カンタクゼーノス帝は慈悲と善行をもってまちと和解しようとし(武器をもってテッサロニケに帰順を強制することは不可能であった)、まち全体および個々の市民に特別の恩恵をほどこそうと書簡を送った

が、何ものをもおそれないゼロータイが後楯にひかえているアンドレアス・パライオロゴスはそれをまちの広場で焼き棄てた。」

一三四九年におこったこの皇帝親書焼消という事件を利用したのが、かねてからアンドレアス・パライオロゴスの専断的な振舞いを快く思わない一人のアルコン、アレクシオス・メトキテスであった。かれは一部テッサロニケ市民とともに、カンタクゼーノスの許に信書をしたためてテッサロニケのひき渡しを申し出で、また、皇帝親書の焼き棄てはアレクシオス・メトキテスとその一党が行った、ローマ帝国からの離叛行為であるととしての責任をあげてゼロータイに負わせる一方、市民の一部および守備隊とゼロータイ覆滅の陰謀をひそかにめぐらした。これに気がついたパライオロゴスは、一三四五年同様、海港付近の住民のもとにはしって、メトキテスおよび他の反革命分子に対し武器をとってたち上るよう命じた。しかしながら反革命分子は以前の事件から何をなすべきかを学んでいたので、徒に時を浪費しておくれをとることなく、アンドレアス・パライオロゴスが海港地区住民とともに夜間武装したという情報をいち早く得る

や、夜が明けるのをまたず攻め入って勝利を収めた。バライオロゴスはまちから追放され、かれの家および海港地区住民の家は掠奪を蒙った。ただ殺害はおこなわれなかった。アンドレアス・バライオロゴスはまずセルビア王のステファン・ドゥシヤンの許に逃亡し、つづいてアトス聖山に落ちのびた。

しかしこれでゼロータイのグループが解体したわけではない。依然まちで勢力を保持し続けたかれらは、貴族支配に身を委ねるよりはステファン・ドゥシヤンにテッサロニケを譲り渡そうと情況判断した。セルビア王はこの申し出をうけてその併合のため、持ち前の気前よさからまちにふんだんの贈物と約束をし、その結果「ゼロータイに同調してまちの移譲に賛成する市民も僅かにとどまらなかつた」(τοὺς τε Ζηλωτὰς καὶ ὁ ἕκαστων οὐκ ὀλίγους ἔπεισε τοῦ ῥολιτῶν ἀντὶ ῥηροσέθεν)。ゼロータイおよびその同調者との話し合いに基いてステファン・ドゥシヤンはテッサロニケ城外に軍をすすめた。苦境に立った総督アレクシオス・メトキオスと「愛国者たち」(ἡλιποποιῶτα)の一派はカンタクゼーノスに対し、急遽救援を要請した。カンタクゼーノスは娘婿であるオスマン・

トルコ人スルタンのウルカンにセルビア人との戦闘を託し、自らはおなじく娘婿のヨハネス五世バライオロゴスを伴って一三四九年秋海路テッサロニケ入りをした。しかしながらセルビア人を解囲させるためのビザンツ軍が到着せず、ひとりヨハネス・バライオロゴスをテッサロニケにのこして、自らはコンスタンティノープルに帰還せざるをえなかつた。ヨハネス・バライオロゴスはまちをセルビア側に移譲しようとしたゼロータイの一味を追放したあと、残党の策動にそなえてテッサロニケで越冬することになった。バライオロゴス朝の正嫡をのこしておけば、かれら一味はまちをセルビア側に引渡すことはあるまい、カンタクゼーノスはこう判断したのである。

一三五〇年はじめカンタクゼーノスは、たまたまストウリェモン河ほとりで二十二隻のトルコ人海賊が掠奪行の最中なのを知って、その援助をえてテッサロニケ入りすることができた。まちでは折から「民衆とゼロータイが貴族に対し蹶起中であつたが」(τῶν ὄχλου καὶ τοῖς Ζηλωτὰς πρὸς τοῖς ἀρίστοις διαταραδαῖσιν)カンタクゼーノスはただちにそれを鎮圧した。全市をあげての祝福日が催され、カンタクゼーノスはヨハネス・バライ

オロゴスとともに皇帝としてうけいれられた。かれらはテッサロニケ全市民を集めて演説し、自分にむけられた内乱の責任は自分ではなく、讒言者にあること、ゼロータイは若皇帝のために自分に刃向う戦いをおこしたというが、実は、「大半が無産のかれらが」(*ἀργοὶ ὕπρες αἰτεῖν ὡς τὰ νομάα*)、「持てる者の財産を掠奪する」(*ἀγαπηθέν τὰ τοῦ σὺβούτου*)ためにおこなったものすぎないこと、いまやかれらはセルビア人を買収されて、自分たちが戦って擁護しようという皇帝のみならず、まぢ全体をも自らの利益のために見棄てたこと、かれらは最初から若皇帝のみならず全ローマ人、全テッサロニケ市民の敵であったこと、をのべたのである。ゼロータイ指導者はとらえられてコンスタンティノープルに護送され、他のゼロータイはまちから追放されて、テッサロニケに対するかれらの支配は終焉した。

- (2) Nic. Greg. II. p. 795—796. (ed. Bonn.)
- (3) Cantac. II. p. 233—235. (ed. Bonn.); Nic. Greg. II. p. 635.
- (4) Nic. Greg. II. p. 613.
- (5) Nic. Greg. II. p. 614.
- (6) Cantac. II. p. 175 sq.

- (7) Cantac. II. p. 177—179.
- (8) Cantac. II. p. 484 sq., 525 sq.
- (9) Cantac. II. p. 393—394.
- (10) Nic. Greg. II. p. 673 sq.
- (11) Cantac. II. p. 568—582.
- (12) カンタクゼーノスはこのくたりに、ゼロータイの潰滅的行為の事例として、(一)かれらが道に大洗礼盤を設け、蠟燭をともし、カンタクゼーノス支持の疑いでとらえられた市民にむかって、カンタクゼーノスとの通謀のゆえに最初の洗礼は効果を失ったという理由をのべて再度洗礼をうけさせ、この儀式について手数料を徴集したこと、これを拒否した者にはカンタクゼーノス派の烙印を押したこと、(二)ゼロータイは居酒屋で飲んでキリストのミステリーを嘲笑したため人々の怒りを買ひ、聖母教会で何人かのゼロータイが殺されたのをはじめ、その一人は広場につれ出されて息がたえるまで石と木で打たれたこと、をのべている (Cantac. II. p. 570—571)。
- (13) Cantac. III. p. 104, 106—114, 116—118.

III

荒筋として以上のような顛末を辿ったテッサロニケのゼロータイ運動はどのように歴史的に意味づけらるべきであろうか。この問いにたいし、現在にいたるまでビザ

ンツ研究者たちによってなされた回答は、それぞれの立場を反映して相互に無限の偏差に富むものであった。

リヨンやパリの蜂起の記憶がなおまなましいルイ・フィリップ治下の反動フランス史家バリゾにとって、ゼロータイはおそるべき煽動家たちにほかならなかった。<sup>(14)</sup>これに反して二十世紀初頭の人民運動の高まりのなかで執筆したルーマニアの進歩的ブルジョワ史家タフラリの眼には、ゼロータイはなんら暴徒ではないどころか、反対に「公<sup>レクシオン</sup>共」の命ずるところを最高の行動原理として人民たちのために、持てる貴族や、教会、修道院に対してたち上ったところの、社会正義の理念に燃える闘士たちであり、ゼロータイ運動はその社会改革のプログラムにおいて一八七一年のパリ・コミューンを取りますものとして映じたのである。<sup>(15)</sup>

第二次大戦後におけるビザンツ学の前例をみない興隆は、当然のことながら、ゼロータイ運動の理解を深めることに貢献した。数多くの個別論文が発表されてその解明にあてられるとともに、ビザンツ帝国の通史や概論はいづれも、十四・十五世紀を扱うにあたって、ゼロータイ運動に言及し、その歴史的意義づけを試みた。そして

最近では、東独のウエルナー<sup>(16)</sup>、ソヴェトのシユジュモフ<sup>(17)</sup>がそれぞれ専門研究を発表し、またソヴェトのビザンツ研究者クルバトフもソヴェトの中世イタリア研究者ルーテンブルクと共同して論文を世に問い、<sup>(18)</sup>ゼロータイ運動に関するそれぞれの見解を明かにした。ミュンヘンの若いビザンチニスト、ヴァイスもそのヨハネス・カンタクゼーノス研究において、ゼロータイ問題に言及した。<sup>(19)</sup>そして史料批判の領域では、タフラリがゼロータイの指導理念を叙述するにあたって基礎としたニコラス・カバシラスの「反ゼロータイ演説」の手書本がアメリカのシエヴチェンコによって公刊されて、<sup>(20)</sup>タフラリの見解およびそれを踏襲した最近までの大部分のビザンツ研究者の見解が重大な批判にさらされることになった。

そこで、このように活況を呈しているゼロータイ研究の現状を展望する作業がどうしても必要になってくるが、本論文ではそれは行わない。また、まずタフラリによって指摘されたところの、一三三九年のジェノヴァにおこったシモーネ・ボッカネグリの反貴族民主運動との類似性やそれからの影響の問題。つづいて、ソヴェトや東独の研究者たちによって展開されたところの、同時代のイ

タリアの都市運動(ローマのコラ・ディ・リエッツイ、フィレンツェのチョンピ)や、ひろくヨーロッパ全体の反封建闘争(フス戦争、ドイツ農民戦争)との構造的比較の問題。これらの問題にもここで立ち入ることはできない。さらにはまた、ゼロータイ運動を解明する上で不可欠の前提としての、十四・十五世紀のテッサロニケ、ないし広くビザンツ都市一般の基本性格、都市を構成する諸社会層、そこに内在する矛盾や対立、都市と農村との関連。これらの問題点についても、ここでは省略しなければならぬ。残された以下の紙数でとり上げたく思ふのはゼロータイ運動のイデオロギーの問題である。

すでにふれたように、タフラーリ以下の研究者が依拠したニコラス・カバシラスの「反ゼロータイ演説」は、けっしてゼロータイの社会改革のプログラムを批判したものでなく、ヨハネス五世のコンスタンティノーブル政府およびこれとタイ・アップした教会代表者たちがおこなったところの、修道院所領の軍事その他の公共目的への転用という政策に反対して、反アポカウコス陣営が作成した論述であることが、シェヴチェンコの研究の結果明らかになった。では、ゼロータイの指導理念、ないし、か

れらを反貴族蜂起にたち上らせたイデオロギーについて、何如なる点に注目して考察をすすめたらいであらうか。以下に問題点の指摘を通じて今後の研究方向の模索してみたいとおもう。

(一) ブラウニングは、専制主義や貴族支配にもかかわらずビザンツ帝国では民主主義の伝統が、競馬場の人民組織デーモス、手工業組合、自由農民共同体などに体现されつつ、貫流していたとし、ゼロータイ運動をかかる伝統とむすびつけて説明しようとしたが、<sup>(21)</sup>ビザンツの国家哲学である、キリスト教終末論に基礎づけられたローマ皇帝のイデオロギーそのものが、<sup>(22)</sup>実は一種の革命論をうちに含むきわめて弾力的なものであった。周知のように東ローマ・ビザンツ帝国では、夫々の皇帝に支配の正統性を保証するのは、元老院、軍隊、市民の三者が一々の候補者に対してその都度おこなう皇帝推戴であり、たとえば属州の軍司令官が麾下軍団におかれてコンスタンティノーブルの皇帝に反旗をひるがえし、都に攻め上って自らが代って即位に成功した暁、もしそれが元老院、市民の歓呼をとりつければ、それは、神龍が先帝を去ってこの者に移った結果とみなされるのであ

った。こうして政治革命は、イデオロギー的に体制化されてローマ帝国の体制そのものをゆるがすことなく、多くの支配者交代の事例にも拘らず、国家の連続性が保証されたのである。<sup>(23)</sup>

(二) 勿論、この公式の国家哲学と対立する民衆のイデオロギーの諸潮流がビザンツに存在し、たとえば、公式の国家哲学をうたいあげたビザンツ教養人の文学作品に数的には圧倒されながら、わずかながらの民衆文学に自らを開示したことはいうまでもない。<sup>(24)</sup>ゼロータイ運動との関連で、ここで指摘しておきたいのは、十四・十五世紀の史料にあらわれる独特の社会観である。

たとえば、時期的に、ゼロータイ蜂起(一三四二)とこれらによる貴族大虐殺(一三四五)とははさまれた時期にコンスタンティノープルで『金持と貧乏人との対話』を書いた一人のセミ・インテリ、アレクシオス・マクレムポリテースは、貧乏のため神の正義についての信念に動揺を来した一聖職者への別の一文のなかで、持ち前の因襲的なキリスト教モラルを突如ふりすてて、同時代の作品にはほとんどみられぬ、つぎのような考えを展開する。すなわち、すべての人間が共通に分ち持つもの

として、出生、生命、死、魂、光、空気、水と火の使用、をあげたのちかれは続けてつぎのようにのべる、「若しすべての物が万人のものなら、大地がその産物同様、万人のものでなければならぬのは明らかである。ただ、飽くことをしらぬ貪慾と、乱暴きわまる搾取がそれらのほとんどすべてを私物化してしまった。」<sup>(25)</sup>

さらにはまた、一三四一年から一四六二年にわたるビザンツ帝国の歴史を記した十五世紀のビザンツ史家ドゥカスは、十五世紀のはじめ、トルコ人のあいだでおこり、キリスト教徒をも糾合して、妻を除く一切のものの共有をとらえた共産主義運動について伝えている。<sup>(26)</sup>

(三) あるいはゼロータイ蜂起に参加したテッサロニケの民衆<sup>デモス</sup>には、たといそれとしてかれらによって自覚されずとも、以上に記したところとあまりちがわぬラディカルな思想が底流として脈打っていたのかもしれない。しかしながら、史料も明かに民衆と区別している、その数も多くないゼロータイのグループ、ないしすくなくともその指導部(たとえばアルコンとなつたゼロータイの領袖、ミカエル・バライオロゴス、およびアンドレアス・バライオロゴスはその家族名から判断する限り、貴

族の出身であつた<sup>(27)</sup>、の指導理念はかかる民衆思想とは同じではなかつたのではあるまいか。ゼロータイが神秘主義思想に反対の立場をとつたことについてはすでにふれたところである。また、当時のテッサロニケが、ギリシア古典の教養を身につけたビザンツ・インテリの結集地点として、首都のコンスタンティノープルを凌ぐ勢いがあり、法律学、神学、哲学などの諸領域にわたってヒューマニストの一大群像を輩出したことはあまりにも有名である。タフラリは、古典古代の巨匠たちに触発されたこれらインテリが、貧しい、抑圧された人々の利益をまもるべく、改革プログラムの周囲に結集し、強力な政治的一党派をかたちづくつて、テッサロニケ市民の最下層に支持を仰いだと考へる<sup>(28)</sup>。イギリスの政治学者バーカーはタフラリのこの解釈を、考えられなくはない推察としてつぎのようにのべる、「ヘシカストの文学上、哲学上の敵手は、相手方である修道士たちの財産没収が行われるさまをおそらく不快の面持では見なかつたであろう。かれらはそのギリシア哲学研究から、或る社会正義の考えを懐くにいたつたのかもしれない。そしてゼロータイがかれらからの支持——おそらくたんなるアカデミック

ク——を享受したと考えることには、ある合理性がある。しかしそれはどんなに見積つても、一つの、勿論考へられなくはない、推察にすぎない」と<sup>(29)</sup>。タフラリが依拠したニコラス・カバシラスの演説の解釈についてシエヴチエンコの上記の批判が発表された今日、タフラリはもとより、バーカーの言葉も、額面どおりうけとるわけにはゆかないであろう。しかしながら、ゼロータイをデマゴークとして処理するだけ<sup>(30)</sup>では、ないし、ゼロータイ・メンバーの階級的帰属関係の分析に終始するだけ<sup>(31)</sup>では、ゼロータイを正しく理解することにならないのではないか。ゼロータイは、何に、何故、そのように熱心であつたのであろうか。ゼロータイ運動は、テッサロニケ民衆を反貴族闘争にたち上らせながら、結局民衆によつて見棄てられなければならなかつた、テッサロニケ・インテリ層の指導するグループの運動ではなかつたであろうか。これが筆者自身の推測である<sup>(32)</sup>。

(14) V. Parisot, *Cantacuzène, homme d'état et historien*. Paris 1845. (筆者未見)

(25) O. Tafaří, *Thessalonique au quatorzième siècle*. Paris 1913.



- (28) Tafrafi, op. cit. p. 201—202.  
(29) E. Barker, *Social and political thought in Byzantium from Justinian to the last Palaeologus*. Oxford 1957, p. 186.  
(30) たゞきはヱマイヌの見解がそれである。Weiss, op. cit. S. 89.  
(31) 「ゼロータイの語の意味の長い前史にかんする」P. K. Chrestu Art. „oi *zylotai*“ (*Opus. kai *thiki* *epureio-ravdeia** 6 (1965) Sp. 461—464 は筆者未見である。cf. Tafrafi, op. cit. p. 229, n. 2.  
(32) ニコラス・カンシラスの演説が批判の対象としている

のがコンスタンティノープル政府のアレクシオス・アボカウロウスないし総主教ヨハネス・カレカスであるというシエヴチェニコ説をみとめながら、かれらはゼロータイと同陣営なので、「演説」からゼロータイの社会改革理念をひき出せるとするウエルナーも、「演説」をゼロータイ運動とならんら関わりないとするシュジュモフも、ゼロータイとテッサロニケにおける古典文化研究の興隆、ないしそれを担ったテッサロニケ・インテリとの関係をひとしく重視しつゝは、*Bephep, yk. coq. ctp. 190; Ciozomob, yk. coq. ctp. 31.*

(一九七〇・八・三一) (一橋大学教授)